

21) 急性気腫性胆嚢炎の3例

高橋 俊昭・岩田 文英
 徳永 慎吾・大崎 直樹 (佐渡総合病院内科)
 服部 晃
 植木 匡・佐藤 賢治 (同 外科)
 遠藤 和彦

気腫性胆嚢炎は本邦では比較的希な疾患であるが、当院で3症例を経験したので報告する。3例とも高度の炎症所見を呈し、うち2例は胆嚢の穿孔を認めた。抗生剤治療と経皮経肝の胆嚢ドレナージ術、待機的根治的的外科治療を行い治癒を得られた。

本症は全身状態の悪化を伴いやすく、上記治療の早期の開始が重要と考えられた。

22) 当院における、乳頭拡張術併用、乳頭非切開下内視鏡的総胆管結石摘出術症例

森 茂紀・鈴木 雄 (県立坂町病院内科)
 近 幸吉
 渡辺 和夫・田邊 匡 (同 外科)

当院において、今まで、不可欠と考えられていた乳頭切開術 (EST) を施行することなく、亜硝酸剤投与と乳頭拡張術を併用し、4症例に計5回内視鏡的総胆管結石除去術を施行しました。大きさは直径4~12mmで、数は2ヶまでで、全例傍乳頭憩室を有していました。亜硝酸剤として使用したNTGテープでは、乳頭拡張は不十分でしたが、拡張balloonを併用することにより、比較的容易に施行が可能でした。1例に、balloonのtroubleによる不成功例を経験しました。また、1例に、異時的に2ヶの結石を除去することができた症例を経験しました。重篤な合併症もなく、症例によっては非常に有用な手技と考え報告しました。

23) 胆道内回虫迷入症4例の検討

中澤 俊朗・能澤 明宏 (刈羽郡総合病院 内科)
 小林 勲
 福田 喜一 (白根健生病院外科)
 本間 保 (本間内科医院)

近年無農薬栽培の流行により回虫症は再び増加傾向にあるとされる。我々が経験した胆道内回虫迷入症の4例に関し若干の考察を加えて報告する。

全例上腹部痛にて発症し、初診時検査所見上白血球数の増加を2例に認めたが、好酸球の増加は認められなかった。また、胆道系酵素と膵酵素の上昇が1例ずつに認め

られた。診断は3例が腹部超音波検査によりなされ、1例のみ膵炎発症例で回復期に施行したERCPにて直接回虫を摘出し診断に至った。腹部超音波検査にて診断された症例のうち2例は、入院早期にERCPを施行し胆管内に虫体が確認できた。この2例はERCP数時間後に上腹部痙痛発作をきたし、その後ERCPの再検で胆管内の虫体は消失していた。いずれもこの間の痙痛発作時に回虫が十二指腸腔内に排出されたものと考えられ、回虫がウログラフィンに弱いとする従来の報告に合致する経過をとった。他の1例は入院を拒否したため、2日後外来にて超音波検査で虫体の消失を確認した。治療としては、全例胆道内からの虫体の消失を確認後、駆虫剤 (コンバントリン) を投与し、うち2例に便中への虫体の排出が確認しえた。

4例の経験より、本症の診断には初診時の超音波検査が最も有用であると考えられた。また、ERCPは虫体の確認手段であるとともに、胆道内からの虫体の排出を期待し、治療の一環としても、早期より施行すべき検査法と考えられた。

24) メシル酸ナフエモスタット持続動注と血液透析が奏功した急性膵炎の1例

和田 茂胤・植木 淳一
 山崎 国男・相場 恒男 (新潟県立中央病院 内科)
 吉村 朗・渡邊 健吾
 高木健太郎・青野 高志
 本間 英之・斎藤 有子 (同 外科)
 清野 康夫・三浦 恵子 (同 放射線科)

症例は64歳の男性で、平成8年10月14日に腹部激痛、背部痛が出現。他院を受診、急性膵炎の診断で入院した。抗トリプシン剤の静注を行ったが、増悪傾向が収まらず、10月15日当科紹介入院となった。TP 5.0g/dl, PO₂ 51.6 mmHg (O₂3l 投与下) 及びCTの画像所見がgrade Vであることから、重症急性膵炎と判定即時、メシル酸ナフエモスタット 240mg/day, イミペネム・シラスタンナトリウム 2g/dayの持続動注開始、これを6日間続行、同時に血液透析を4日間行った。以上開始当日の夜より、腹痛は著明に軽快、第6病日に腹部CTで膵の腫大と壊死傾向は著明に改善他の検査値も著しい改善傾向を示した。